

歴史よもやま話 その 21

手の平の小宇宙 楽茶碗

「一楽二萩三唐津」というのをご存知だろうか。

これは、茶道を嗜む人が好む抹茶茶碗の順位と言われている。一位の「楽」とは楽焼茶碗のことで、黒楽と赤楽がある。

「なんや、あんた」(中略)「ああ、ご挨拶があとになってしまいました。わたしは、千宗易という茶の湯の数寄者。長次郎殿の飾り瓦を見ましてな、頼みがあってやってまいりました」

(中略)「茶碗を焼けという話やが、わしは轆轤をつかわへん。まん丸の茶碗はよう焼かんけどそれでええのか」「焼いてもらいたいのは、手のすがた、指にしっくりなじむ茶碗。轆轤をまわしてはとつとつくれません」宗易は両手を合わせて、茶碗を抱くしぐさをした。

山本兼一著の小説「利休にたずねよ」<白い手 あめや長次郎> (天正 13 年)

に書かれている一節である。利休と長次郎の出合い、そして楽焼が創り出されるまでの経過・情景が書かれている。

千宗易(利休)は自らが標榜する侘び茶を実践するにふさわしい茶碗を求めていた。そして瓦屋の息子・長次郎と出合い、彼を指導して楽焼を創設、爾来今日まで 15 代に亘り、「茶碗や楽家」が続くことになる。

轆轤を使わず手捏ねで形を作り、乾燥後へらで削って容ちを整え、小さな炉で 1、2 個焼く。黒楽は 1200℃、赤楽は少し低温で焼成する。制作に手間がかかりえらくコスト高の茶碗になるが、1 つひとつが個性溢れるものになる。

両の手のひら内に入り、よく掌に馴染む。「手のひらの小宇宙」といわれた。

代々楽吉左衛門を襲名し、入滅後は「入」がつく号が冠される。三代目が最も有名で

「道入」渾名を「ノンコウ」と言われた。代々直伝・口伝でなく、それぞれが工夫して茶の湯に特化した茶碗の制作に精進した。「千家十職」の筆頭に数えられる。

14 代覚入は、東京美術学校彫刻科を卒業、第二次世界大戦から復員後楽吉左衛門を襲名、楽美術館を設立、楽家に伝わる歴代作品や資料を寄贈し公開した。

15 代楽吉左衛門も東京芸術大学彫刻科を卒業。現代性に大きく踏み出し、大胆なへら削りによる彫刻的、前衛的な作風を築きあげている。特に「焼貫」という技法を駆使した製法は歴代楽家の作風を一変させている。

京都堀川通り、一条戻橋近くに「楽美術館」があり、楽家歴代の茶碗の他、その時々テーマに沿った作品が展示されている。

先日、テレビ番組「なんでも鑑定団」に黒楽茶碗が出品されていたが、その評価額は 500 万円であった。